大月人物伝
歴史探訪

世界にはばたいたテノール歌手

小林　一男

名伯楽に名馬ありの例えをまさに地で行った子弟関係である。一九六六年（昭和四一年）当時国立音楽大学四年に在学中の佐々木加代子（以下佐々木と略す）が教育実習に都留高等学校に来ていた。これが世界にはばたいた小林一男との劇的な邂逅であった。

当時二年生の小林はトップクラスの成績で入学、一年生では国立一期校を目指すクラスに入っていながらも、受験中心の教育への反抗もあってコーラス部に入部、二年生から就職クラスに移っていた。この時コーラス部で歌っている小林の歌唱力に驚異の目を見張ったのが佐々木で、この子は後々ナンバーワンの歌手になる、この子を音楽の世界から失うことは日本の損失であると直感した。これから以降、佐々木／小林の子弟コンビが小林の世界にはばたく出発点となったのである。

初狩在住の小林は初狩駅から大月駅まで朝一番の電車に乗って登校し、用務員室で音楽室の鍵をあけてもらうと、まずピアノの練習、授業が始まり出欠をとると、次は図書館や佐々木のもとで音楽の勉強をし、夜十時過ぎの電車で帰宅する。そしてその間、大月の町で佐々木が予め了解を得ておいた河合楽器のショールームのピアノを弾かせてもらっている。この練習量は想像を絶するすごさで、ピアノの音階を狂わせてしまった（鍵盤を叩きつぶしてしまった）程でした。

そしてこの一年半という短い期間でこの二人三脚の子弟コンビは、当時声楽では日本一と言われた国立音楽大学へもトップ合格を果たした。

小林の大学合格後も、佐々木はピアノを月賦購入して小林に与えて、より一層努力を促したのであった。

小林の実家は初狩町で、七人兄弟の六番目で、両親及び祖母を含めて十人という大家族の中で育った。初狩小学校時代は野球に、初狩中学校時代は卓球に熱中していたスポーツ少年でしたが、学業成績も抜群で、文体バランスのとれた優秀な少年でした。

特に中学校時代放課後の体育館での卓球練習後、ある秋の夕方、静かになった体育館の片隅で、コーラス部が地区合唱コンクールに向けて最後の追い込み練習に入っていたコーラスの音色が何となく心の奥底にある音楽の琴線に触れた感覚が、身体の中に残っており、これが伏線となって、後年、高校時代に音楽といった噴水となって迸り出るのである。

父親は大工職であったが、男の兄弟四人の内、誰かを自分の職業の跡継ぎにしたいという願望があったようである。しかし上から次々に家を離れて行くので、最後に残った小林に望みを託していたようである。

小林が国立音楽大学合格後、前述佐々木から贈られたピアノを収容する為に部屋の増築が必要となった。大工職の父親はこの増築工事を小林と共同作業で行うのであるが、自分の大工職の後継者としての最後の願を込め、大工道具を新調して小林を手伝わせていたようである。この後、小林は音楽の道を驀進して父親の願いは終焉するのであるが、小林の器用な素質をよく観ていたのである。

大学進学後、大学院ニ年次にイタリア声楽コンソでミラノ大賞を受賞し、ミラノヴェルディ音楽院へイタリア政府給費生として旅立った。

ミラノ留学中、ここで先の佐々木に次いで第二番目の恩人に出会う。その人はミラノ・スカラ座のプリマドンナで一九四〇～一九五〇年、伝説の名テノール ベニアミーノ・ジーリと共に活躍したマリア・カルボーネ女史である。此処でカルボーネよりプロ意識としての音楽の骨格を作り上げられたのである。この素晴しい恩師との出会いがその後総決算として、スカラ座でのデビューという節目をもって音楽学からオペラ歌手へ・・・勉強から演奏活動へと入って行ったのである。

留学二年目の一九七四年、レッジョ・エミーリア国際声楽コンクールで特別賞を受賞すると共に、世界的に有名なスカラ座に併設されている小規模オペラ殿堂「ピッコラ・スカラ座」で、ドニゼッティの歌劇「リタ」ベッペ役でデビューを果たすと共に、同年レッジオ・エミーリア国際声楽コンクールで特別賞を受賞した。

デビューを果たしたものの、この時代世界を覆っていた石油ショックの頃であったので、イタリアも経済状態が非常に悪く、小林自身も一年間の奨学金給付の終わった時期でもあったので、日本へ帰るかヨーロッパで歌手として食べていくかの岐路に立たされていた。兎に角不景気なイタリアでは、小林の歌う場所はなかなか見つからないので、先輩たちの話を聞くとドイツに行くとたくさん劇場があって、専属歌手の口もあるということなので、意を決してドイツに行くことにした。

言葉の障害とたたかいながらドイツ語で歌わなければならないドイツ北西部オーデンヘルグのオーデンヘルグ国立劇場で日本人が「イタリア歌手」としての契約を取ることができた。

イタリアンリリックテノール専属歌手としてこの地でニ年間活躍後、オーデンヘルグを辞め、ミラノに戻りイタリア国内でコンサート活動をしながらそろそろ日本で歌ってもいい頃かなと感じていた。

丁度この頃、二期会（二大歌劇団の雄、他に藤原歌劇団がある）からの誘いがあったので、オペラ「蝶々夫人」でデビューする為帰国することになった。

ヨーロッパで活躍し、たとえそれで成功し、世界中の劇場を飛び回ったとしても、根本的にはいつまで経っても異邦人、よそ者じゃないか・・・と思うようになっていた。自分が一生音楽をやるなら、一生歌うのなら、その歌をいつまでも見てくれる人たち、そんな人たちの中で歌ってゆきたいと思うようになって日本に戻る決心をした。

日本での活躍は以後一九八三年ジロー・オペラ賞受賞、一九八九年オーチャードホール・オープニングオペラ「魔笛」、一九九一年日生劇場「モーツァルト没後ニ〇〇年六大オペラ公演」、一九九三年三枝成章「千の記憶の物語り」、一九九四年團伊磨「素戔嗚（すさのお）」（初演）等意欲的な活動が続き、一九九六年にはＮＨＫ交響楽団より「有馬賞」を授賞された。また一九九七年三枝成章「忠臣蔵」の名演は楽壇の話題を独占し、新国立劇場こけら落とし公演、團伊玖磨「建（たける）」の舞台も賞賛された。現在、国立音楽大学客員教授である。

小林の信念は「音楽は人間のあらゆる感情が含まれており、それが言葉の魅力を根底から支えている」である。

これからもますます期待される逸材である。

執筆者　小林　脩一